



特定研究プロジェクト2 2004年度第11回研究会

日 時 / 2005年1月27日(木) 午後5時～7時
会 場 / 同志社大学 今出川キャンパス 扶桑館CISMOR会議室
発 題 / 嶋本隆光(大阪外国語大学留学生日本語教育センター助教授)
「M.モタッハリー師の指導者論: 12イマーム派シーア主義の政治と倫理」

研究会概要(概要のみ掲載)

今回の研究会で、嶋本氏は特にモルタザー・モタッハリー師の著作に通底するイマーム論と、イスラーム的民主主義の思想をとりあげて論じた。同氏によれば、モタッハリーは指導者をめぐる理論においてスンナ派とシーア派の相違を意識し、後者の正当性を明確に主張していた。モタッハリーは、政治と宗教の不可分を説明すると共に、共同体の指導者であった12人のイマームたちがイスラーム(信仰)の守護者であったとし、後世においてはイスラームの守護者としてのイスラーム法学者(rouhaniyat)が代わって必要とされることを説いていた。

同氏はまた、モタッハリーは、西欧民主主義は「個人の自由」とムジョリティ・ルールに基礎を置いているとしたのに対し、イスラーム的民主主義を人間的なふるまいを意図する「真の自由」に依拠しているとしたことを述べた。イスラーム世界と欧米の世界観においては、前者が個人を、後者が集団を主体としているとする。モタッハリーはイランの人々がイスラームを受容している限り、こうした差異を認めた上で西欧型の民主主義を受け入れることは不可能であり、後者の概念に基づいたイスラーム的民主主義設立の重要性を主張しているとした。

(COE研究指導員 中村明日香)